

與朝鮮中阻大海。明之於朝鮮。雖路程相通。而遼悠。窻遠。雖曩晉漢唐之師。僅拉其平壤而止耳。壬辰之後。則明軍踰拉釜山前洋。而日本兵直突入平壤。其

相涉。歷艱險。豈翅千百里也哉。此開闢以來之所罕。不可不記載。以傳世也。而三國所錄。各詳乎此。而略乎彼。或精于內。而粗于外。間亦或有轉相訛謬。同事

而乖忤者。此翁之所以有斯舉也。然則其實記其三國之事。而題以兩國者。何乎。日本征討之賓也。朝鮮得罪之主也。明兵則援之者也。此其所以兩而不三

也。嗚呼。是編也。言簡事核。搜索精到。引據的確。乃校之他書。紛紜錯雜。而多偽。謀豈可同日而語也哉。翁名尚長。字某。諱博。典故而綜理百藝。乃於是舉。亦足

窺其一斑。冀隨者其有以識之哉。

文政戊子年夏日

對州講官川士纓撰

大竹為造

朝鮮征討始末記總目

卷首

凡例

朝鮮國歷代畧紀

朝鮮國八道附八道圖

卷之一

壬辰役發端之事

宗對馬守義智到于朝鮮之事

通信使入洛到聚樂亭附歸國之事

琉球朝貢并和情報大明之事

宗對馬守義智重到朝鮮之事

日本諸將朝鮮渡海小西行長攻落金山城之事

卷之二

加藤清正攻落慶州城附宇喜多秀家渡海之事

小西行長陷忠州之事

日本諸將於忠州會合附加藤小西口論之事

加藤清正渡漾江并小西行長入京城之事

卷之三

小西加藤黑田臨津合戰之事

加藤清正入咸鏡道擒西王子之事

小西行長押臨大同江之事

重軍勢渡海朝鮮之事

玄蘇調信會李德馨之事

小西行長等大同江岸對陣之事

卷之四

小西行長等乘取平壤城之事

小西行長等與明軍戰安定館之事

加藤左馬助乘取番船之事

筑紫上野介攻熊嶺之事

小西行長於平壤與朝鮮諸將迫合戰之事

小西行長與沈惟敬會談之事

宇喜多秀家攻落朔寧之事

忠州原州春州等在陣諸將與朝鮮軍合戰之事

福島勢在番永州慶州落城之事

卷之五

黑田如水立花宗茂討散朝鮮一揆之事

小西行長用朝鮮土民於間者之事

牡丹臺平壤合戰附小西行長引退于京城之事

小早川隆景碧蹄驛合戰之事

加藤木村長谷川攻幸州山城之事

沈惟敬再調和議之事

卷之六

日本諸將引退王城之事

明使抵名護屋同歸國附晉州城攻之事

明冊使伏見來着附和議破斷之事

卷之七

和軍重渡海于朝鮮附加徳島船軍之事

加藤小西攻黄石山城之事

諸將攻南原城同落城之事

黑田毛利稷山合戰之事

卷之八

蔚山龍城諸將後詰之事

順天蔚山泗川望津新塞合戰之事

日本勢開退諸城附船軍并諸將歸朝之事

和好成就通信使渡海兩國太平之事

朝鮮征討始末記總目終

凡例

一 豊臣家の朝鮮征伐せる事蹟を記せるは朝鮮征伐記
 朝鮮太平記を始め諸家の記録且事遇たる豪傑の物
 語子策れ聞書覺書等の世小傳る者少くは如何も
 實説たもとも但異域まこれ關戦已小二百年を経たれ
 ば其事蹟の語を傳へ書傳へ等小至てハ魯魚烏馬馬の
 誤寫三豕河を渡る文變の謬々無みも有づるは其
 朝鮮の事蹟と日本諸家乃記録吾國の傳書とを牽合せ
 件ニ參考して輯録せる者也然しども此小漏たるを偽
 と云ふ小非ハ鷄林も頗る騷冗の砌たれを必定遺漏セ

るもの無しと云ふべし

一 朝鮮の事蹟ハ柳成龍の懲必録を對州の儒負某此和鮮
せる有る今次予在韓中朝鮮板此懲必録を熟閱し證
書を以て前儒の和鮮と添削するもの多し又斯編を用
なたむれし省略も少標題小壬辰録と名るハ成龍の言
ふやある耳目に遠ぶ所る壬辰より戊戌に至る迄と述
べられと云ふ本づけし

一分注を各書と輔ふべき件ニと官職位階の大槩と道理
の都合せるもの其外予在韓中その判事通詞を聞て処
れ直話等と書載り卷中一事も憑據なれば非ざる苟も一

己の杜撰を用ひど

一 書よ加藤清正の元良哈と陷る事或ハ女直よ於て
合戦或ハ濟州を攻め落し事なると云るハ更ニ據を以て謬
説なり清正ハ朝鮮の北地咸鏡道鏡城會寧を攻入ら
れ多し事と云女直界とハ云へばも女直迄ハ未だ遼
隔たる事なり又同書ハ女直と元良哈と同國と云へり
ども是又相違せし清國燕京の東ハ遼東なり遼東の東
北より朝鮮の北もくと云女直と云遼東の西北より燕京
北宣府の東迄ハ間居る夷と元良哈と云然る時ハ
女直と元良哈とハ自ら別種なり況て朝鮮咸鏡道と元

良哈と方角違ひならず又濟州ハ朝鮮南海中全羅道の
 洋小日本里程より凡七十里ほど出でたる往昔耽羅國
 と云る一島にて日本五島と對頭といふ咸鏡道ハ蝦
 夷と遠小對頭と云是濟州と咸鏡道等ハ南北の背馳
 する節とも清正の攻めざる所あり取まらざるが故なり
 一 對州の儒負兩森伯陽産五郎と云江州の門下は朝岡蘭
 曉なる者初め太郎八と稱し延享信使來聘の時真文役
 たり對州の儒負文朝鮮に製述官書と掌る典籍朴敬行
 など客路の宿めて前日俱に見たる所は碑文を問ふに
 蘭曉直ち小筆と馳る事三百餘字一字も遺失なく一行

大子舌を卷き博聞強記と贊美せらるる宝曆初年予京師
 少く蘭曉小此事ありや否やと尋ち頼て筆と執て書
 して予小與ふ延享より五六年を経たれども更は又遺
 失なり其強記と云く斯の如く蘭曉カと云る壬辰後の
 事蹟を聞き諳ぐる事頗る詳なり予因て深く信仰し其
 話を取て載せらる事まゝ是あり

一 壬辰の役は對州も日本諸總軍に引導なれば諸大將衆
 は案内に附け置し既小加藤殿に附置し服部某と云る
 者清正乃推舉して王子の嫡なせ太閤より陣羽織と思
 賜あり子孫今も其外套を傳ふ況て朝鮮少く將士平聞

戦子粉骨と盡ちて件ニも少くも雖も著述の煩瑣
と厭ひ一二を擧て餘ハ省々少日本勢渡海幾若干人
都て皆對州を徑ちて無一國小残る老幼病痾支離
の輩も程に附て客船の用度と辨せしむ婦女ハ一廊
居きて布帆等の虧損を補てしむ壬辰より戊戌まで七
年の間兵士の車勞ハ言よ及び婦女子至るまで疲勞
ヤ件々枚擧するあり

一 朝鮮の曲折ハ懲録ニ精細なれども明國の件ニ疎脱
ありて詳ならず故に武備志の朝鮮考及び征韓記等と
摘録して参考に備ふ聊々本朝明國朝鮮の説ニ参伍符

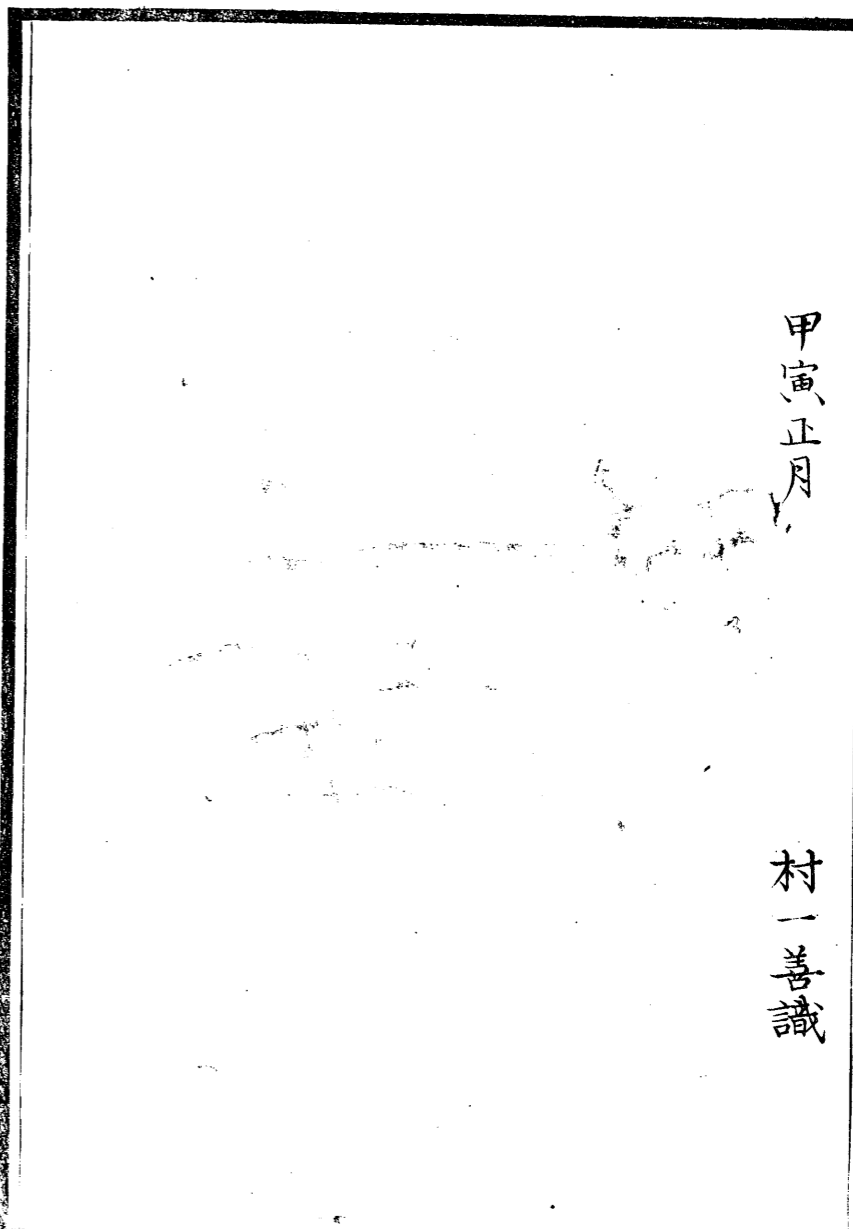
合せるを擧て証據と以但一鮮考と云者ハ武備志の朝
鮮考なり韓記と云征韓記なり或知る讀者誤る事ハ
少し

一 一年予崎陽北邸吏小任せり郡中小本國の象官朝野某
なる者佐吏たり尚々鶏林の事蹟と問ひ糾一誤謬と
改むる者頗るあり

編内記壬辰至戊戌七年間韓軍始末而原本標題係
以壬辰恐人皆謂止壬辰之役因今改名朝鮮征討始
末記以解世人之惑但非好而然故亦存所言命題之
事與原序示不敢私增損焉

甲寅正月

村一善識



朝鮮國歷代畧記

韓人直說

朝鮮國

檀君王儉元年唐堯二十五年

平壤之都

朝鮮本燕の域内にして燕乃臣王儉此地を守り仁政を

施て人民を懐け知勇を以て國內を治め自然と武威も

盛り行はき又燕の勢い衰へぬを以て終つ燕の叛藩

と出て分國となり始て朝鮮と名づけ王号と稱ふ

朝鮮

箕子姓子名胥餘元年即周平壤小都

王儉の末親小箕子の封國となり子姓四十一代箕準小

至く七代三韓となる

三韓

馬韓

辰韓

弁韓

漢惠帝元年